

子どもと保育の情景 (7)

「話を聞く態度」をめぐる覚書

戸田雅美

何年前か前、ちょうど修了間近の五歳児のクラスで、修了にあたって幼稚園の思い出を一人ずつが前に出て話すという場面を見た。たまたま、その場面を一緒に見ていた小学校の教師の経験があるという指導主事の先生からは、「もうすぐ小学校でもありますし、話を聞く態度やみんなの前で話すことをもっと経験させておく必要がありますね。子どもたちは、話したい気持ちはある様子だけでも、慣れていないせいか、自信をもって話せていないように見えました」というよう

なコメントがあった。

私も同じ場面を見ていたので、この先生のコメントに半分納得しながら、半分疑問に思っていた。この場面を振り返ってみると、確かにすぐに隣の子と関係のないおしゃべりを始めてしまう子どもがいて、担任が注意することもしばしばであったし、前に出て発言すべき子どもが、もじもじと話せない場面もしばしばあり、担任が話を促すことが多かったからである。しかし、私には、これは「経験させておく」「慣れる」と

いう問題なのだろうか：という疑問が残ったまま、そのことを十分に整理できないままに過ぎていた。

その後、別の園で、同じように、クラスの全員が集まって、修了にあたって幼稚園の思い出を話し合っている場面を見ることになった。

クラスのみんなが集まると、幼稚園での思い出を話し合いたいということ、その話し合いをもとに修了式図を担任が話すのを子どもたちはわくわくしながら聞いている。どうやら、飼育している動物の当番を四歳児に引き継ぐ活動などを通して、「修了」ということが実感されているところらしく、担任の「修了式」という言葉に、隣の子どもとちよつと抱き合ったり、顔を見合わせて照れくさそうに笑い合う子どもがいる。それがほかの子どもたちにも伝播して、そのざわめきが「わくわくしながら聞いている」と私には感じられ

たのである。

担任にもその気持ちが伝わったのか、そのざわめきを特に注意することなく、にこにこ見守っていたが、「どんなことがあったか、話したい人はいるかしら？」と尋ねる。すると、さつそく手が挙がり、「じゃ、みゆきちゃん」と指名されたみゆきが立ち上がる。みゆきは、「みんな、みんなのコマが回るように回したこと」と言う。聞いていたクラスの子どもたちの中から「修了式にみんなでコマ回したい！」という声上がる。担任は、「修了式でコマを回すのか：!? うーん、考えてみないとね。でも、コマ回し楽しかったね。グループでみんなのコマが回るかを試したじゃない? グループのみんなのコマが全部一斉に回るように頑張つて、一斉に回ったときはうれしかったよね」と、とても楽しそうに受け止める。「ほかにはあるかしら？」と聞くと、だいちが、「お餅つきしたこと」と言う。子どもたちは、近い過去から思

い出していくらしい。すると、担任は、「あー、だいちちゃんのお父さんもお手伝いに来てくれたものね」と手で餅つきのふりをしながら受け止める。すると、聞いていた子どもたちも次々と餅つきのふりを始め、中には立ち上がって本格的に餅つきのまねをして見せる子も出てくる。あらあら、楽しくって身体が動き始めてしまったな、聞く気持ちが崩れてしまうかしら……と思いつつ私は見ていた。

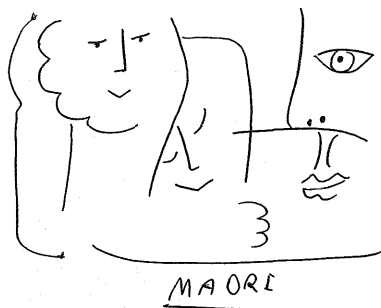
ところが、担任がまた次を促すと、子どもたちも席に戻って、次の子どもの話を聞く。子どもが次々に発言するたびに、担任も「そうそう、そうだったね!」ととても感動してうれしそうに受け止め、担任自身の言葉がこれも楽しそうに加えられていく。

このようにして、二十分以上の時間が過ぎていき、ちようと、遠足の話になったとき、何人かの子どもたちが、もう我慢しきれない、もっと詳しく話したいというように、担任のそばに行って、一人ひとりが話し

始めた。担任も、席に戻るように注意するのではなく、近くに来て話しかける四人の子どもたちと、楽しそうに会話を始めてしまった。

おやおや……この四人はいいけれど、ほかの子どもたちはどうするのだろうか? と見ていると、それぞれが、近くに座っている子どもも同

士が近くに座ってしまった。自由に席に座っていたので、友達を始めてしまった。クラス中がにぎやかになる。考えてみれば、しばらく、挙手しては一人の子が話すということが続いていて、それを聞くうちに、それぞれの子どもが、自分



にとって大切な幼稚園での出来事を思い出し、誰かに聞いてもらいたくてたまらなくなっていたのかもしれない。ただ、聞いてもらいたい相手は、必ずしも今すぐに担任である必要がないから、全員が担任の近くに集中してしまうことがないだろう。どうやら、近くの友達同士、互いに話しては聞き合っていることで十分に満足できている様子である。

しばらくするとまた、担任を中心としての話し合いに戻るといことが続き、とうとう四十分以上もクラス全体で話し合った末、「また明日もこの続きをしよう。まだ忘れていることもあると思うから、みんなを思い出しておいてね」という担任の言葉でこの時間は終わった。それでもまだ、友達同士話しながら、いすを片づける子どもたちの姿があった。

小学校低学年での学級崩壊が問題になってからだろうか、クラス全体で話を聞く態度やクラス全員の前で

話をできることが、就学前に強く求められるようになった。小学校一年生で四十人にもなるクラスでの授業がはたして適切なのか、という議論は重要ではあるがあえてここでは触れないとしても、クラス全体で話を聞き、話すことは、単に「態度」や「能力」や「慣れ」の問題ではないだろう。さらに、単純な意味での「経験」の問題でもないだろう。そのためには、話をする意味、聞く意味が理解できる「経験」や受け止めてもらえることのうれしさや受け止めるということのおもしろさが理解できる「経験」が不可欠である。また、もう一つ、話しても聞いてもうれしい、そんな人間関係の集合としてのクラスが必要条件になるはずである。

この日の話し合いの場面から、私は、これまで抱えていた問題を整理する、一つのヒントを与えられたように思った。

(東京家政大学)